Ⅰ　患　者　情　報

１　総括及び全数把握対象疾患

・　一類～五類感染症

・　獣医師が届けを行う感染症

２　定点把握対象疾患

・　週報・月報対象疾患「五類感染症」

３　鹿児島県の風しん予防対策

・　鹿児島県の妊婦における抗体検査の調査事業

１　総括　及び
全数把握対象疾患

（１）一類感染症

（２）二類感染症

（３）三類感染症

（４）四類感染症

（５）五類感染症

（６）獣医師が届けを行う感染症の発生状況

総括及び全数把握対象疾患に関する動向

（2017 年 1 月～12 月）

鹿児島県感染症発生動向調査企画委員会委員長
鹿児島県医師会会長
池田　琢哉

【平成 29 年度のトピックス】

○RS ウイルス感染症が，夏に流行する

RS ウイルス感染症は，小児科定点医療機関から 3,358 人の報告があり，平成 28 年（2,254 人）より 1,104 人増加。第 35 週にピークがみられ，第 43 週まで高値が続いた。通常は冬を中心に患者が増加するが，近年，流行時期が早まってきている。

○梅毒が全国で 2 年連続 4000 人を超過。現集計方式（1999 年以降）では最多となる

性行為などで感染する梅毒患者が 2 年連続で 4,000 人を超え，国立感染症研究所が行う現行の集計方式となった 1999 年以降では過去最多となる。鹿児島県でも平成 28 年（18 人）より 3 人増加。

【感染月齢】

１月　○姶良保健所管内において第 2 週にインフルエンザ様疾患により，今シーズン初めての学年閉鎖措置の報告。

○第 4 週にインフルエンザの定点当たりの報告数が 38.05 となり，県内全域にインフルエンザ流行発生警報（基準 30）が発令。

２月　○2 月 2 日に県内全域にインフルエンザ流行発生警報（定点当たりの報告数 30.0）を発令。

○名瀬保健所管内で流行耳下腺炎の定点あたり報告が基準値の 2.00 を超え，17 週連続で流行発生警報域となる。

３月　○ＲＳウイルス感染症，Ａ群溶血レンサ球菌咽頭炎の報告数が増加。

４月　○手足口病の川薩保健所の定点あたり報告数（1.15）が，第 14 週（2.00）から約 6 倍に増加し，流行発生警報の開始基準値の 5.00 を超える。

○Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎の報告数が 3 週連続で増加。川薩保健所，鹿児島市保健所で多くなる。

５月　○結核の届出が，本年 1 週～20 週まで 114 例（昨年同時期 110 例）。60 歳以上の高齢者の届出数が多く，60 歳代以上が 85 例で，全体の約 75％を占める。

６月　○手足口病の報告数が，前週（107 人）より 34 人多い 141 人（定点当たり報告数 2.56）で 2 週連続で増加。志布志保健所（7.00），川薩保健所（5.25），鹿屋保健所（4.20）が流行発生警報域となる。

７月　○手足口病の定点当たり報告数が 5.60 で前週（3.84）となり，5 週連続で増加。第 27 週から県内全域に流行発生警報が発令。ヘルパンギーナの定点当たり報告数も 3.56 となり 9 週連続で増加する。

○手足口病・ヘルパンギーナ患者から検出されたウイルスは，両疾患ともコクサッキーウイルス A6 型が全体の約 7 割を占める。

○重症熱性血小板減少症候群(SFTS)の届出が，今年度 8 例目（昨年同時期は 1 例）となる。

○カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症の第 29 週の届出が 2 例。2017 年における 6 例目(男性 3 例,女性 3 例）の届出となる（昨年同時期も 6 例)。

８月　○第 35 週の RS ウイルス感染症の定点当たり報告数が 4.94（267 例）となり，過去 5 年間の定点当たり報告数の推移と比較して特に多くなる。全国でも例年になく早い時期から増加傾向が続き，34 都府県が前週より増加する。

９月　○第 38 週までの後天性免疫不全症候群患者届出数が 13 例（昨年同時期は 7 例）となり平成 28 年の届出数 11 例を超える。

１０月 ○薬剤耐性菌の報告数は 14 人で，メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症のみの報告で前月（11 人）より増加。基幹定点 12 カ所のうち 5 カ所からの報告がある。

１１月　○第 48 週の感染性胃腸炎の定点当たり報告数が 7.85（424 例）で 4 週連続増加。保健所別では，出水保健所（14.67)，姶良保健所（10.29)，鹿児島市保健所（10.08）の順で報告。県環境保健センターに医療機関から提出された感染性胃腸炎の検体からはノロウイルス GⅡ.4（3 検体)，GⅡ.3（1 検体)，アデノウイルス 40/41（1 検体）が検出される。

１２月　○つつが虫病の届出が，14 例（前週 7 例）あり，累計で 42 例(昨年同時期 50 例)となる。保健所別では,鹿屋保健所 19 例,鹿児島市保健所 5 例,志布志保健所 5 例,姶良保健所 5 例の順で報告。

○インフルエンザの定点当たり報告数が 21.58（2007 例）となり 6 週連続で増加。川薩保健所（35.00）と出水保健所（32.20）で，インフルエンザの流行発生警報域（30.0）を超える。

【全数把握対象疾患の概要】

感染症発生動向調査は，全数把握対象 85 疾患および定点把握対象疾患 26 疾患について調査を行っている。

○一類感染症の届出はなかった。

○二類感染症の届出は，結核のみであった。届出数は 322 例で，前年（326 例）に比べ 4 例減少した。病型は，肺結核が 180 例で最も多く，無症状病原体保有者は 87 例であった。年齢別では 80 歳以上が 113 例で最も多く，70 歳代 60 例，60 歳代 46 例の順であった。

○三類感染症では，腸管出血性大腸菌感染症が 57 例で，前年（51 例）より 6 例増加した。月別では 8 月 12 例，9 月 11 例，5 月・7 月・10 月が 6 例であった。血清別では 026 が 21 例で，0111 が 14 例，0157 が 11 例であった。年齢別では 30 歳代が 9 例で最も多く，2 歳 6 例，7 歳・10 歳代で 5 例であった。保健所別では鹿児島市が 19 例で最も多く，鹿屋 9 例，姶良 7 例の順であった。

○四類感染症では，つつが虫病が 66 例，日本紅斑熱 18 例，重症熱性血小板減少症候群（ＳＦＴＳ）11 例，レジオネラ症 7 例，Ａ型肝炎 1 例，レプトスピラ症 1 例であった。つつが虫は前年（77 例）より 11 例減少したが，都道府県別では前年に引き続き 1 位であった（2 位・千葉 40 例，3 位・広島（39 例))。月別では 12 月が 39 例で最も多かった。重症熱性血小板減少症候群（ＳＦＴＳ）は，前年（4 例）より 3 例増加し，死亡例 4 例が発生している。年齢別では 60 歳代（4 例)，80 歳以上（3

例），70 歳代（2 例）の順に多かった。都道府県別では宮崎県の 13 例が最も多かった（2 位山口（12 例），3 位長崎・鹿児島（11 例）。

○五類感染症では，侵襲性肺炎球菌感染症（24 例），梅毒（21 例），急性肺炎（21 例），後天性免疫不全症候群（18 例），カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症（10 例），アメーバ赤痢（7 例），クロイツフェルト・ヤコブ病（6 例），破傷風，水痘：入院例，播種性クリプトコックス症（各 5 例），ウイルス性肝炎（Ｅ型・Ａ型を除く）（4 例），劇症型溶血性レンサ球菌感染症（3 例），侵襲性インフルエンザ菌感染症，侵襲性髄膜炎菌感染症，薬剤耐性アシネトバクター感染症，クリプトスポリジウム症（各 11 例）の届出があった。梅毒は前年（18 例）より 3 例増加し，25 年以降増え続けている。年齢別では 20 歳代，30 歳代，40 歳代が 5 例であった。

本感染症発生動向事業定点医療機関，並びに全数把握対象疾患のご報告をいただいた医療機関に感謝申し上げます。

今後も感染症の早期発見と早期治療に努めることで，地域への感染症防止に尽力していきたい。

(1)一類感染症の発生状況

発生報告なし

(2)二類感染症の発生状況

平成29年の県内における二類感染症の届出は，結核が322例で，平成28年の326例に比べ，4例少ない届出であった(表1-1-1，表1-1-2，図1-1)。病型では，肺結核(180例)，無症状病原体保有者(87例)，その他(55例)で，年齢別では，80歳以上(113例)，70歳代(60例)，60歳代(46例)の順に多い届出数であった。

表1-1-1 月別発生状況

月	報告数	無症状病原体保有者（再掲）
1	26	7
2	21	3
3	21	4
4	31	5
5	31	8
6	36	13
7	27	7
8	19	2
9	30	11
10	27	6
11	31	17
12	22	4
合計	322	87

表1-1-2 保健所別発生状況

保健所名	報告数	無症状病原体保有者（再掲）
鹿児島市	143	39
指宿	6	2
加世田	5	0
伊集院	5	2
川薩	30	9
出水	14	2
大口	9	2
姶良	35	8
志布志	8	0
鹿屋	25	2
西之表	3	0
屋久島	0	0
名瀬	28	14
徳之島	11	7
合計	322	87

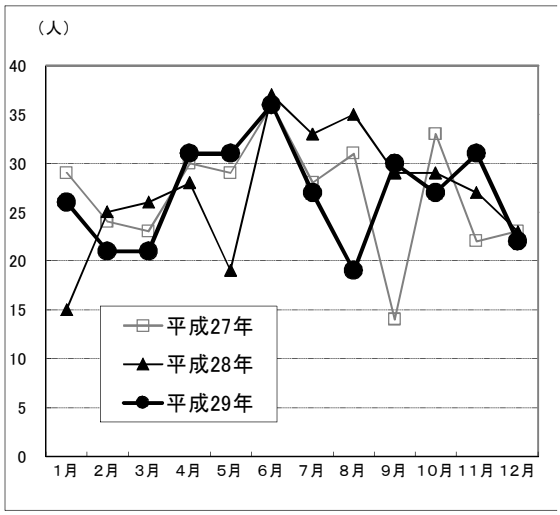

図1-1　平成27～29年の結核発生状況

(3)三類感染症の発生状況

平成29年の県内における三類感染症の発生状況は，腸管出血性大腸菌感染症57例(図1-2-1，図1-2-2，図1-2-3，図1-2-4，表1-2-1，表1-2-2，表1-2-3)であった。

○腸管出血性大腸菌感染症

県内における腸管出血性大腸菌感染症の届出状況は，前年(51例)より6例多い57例(患者32例，無症状病原体保有者25例)であった。月別では8月(12例)，9月(11例)，5月，7月，10月（それぞれ6例）の順に(図1-2-1，図1-2-3)，血清型別では026(21例)，0111(14例)，0157(11例)の順に多かった。(図1-2-2，図1-2-4，表1-2-1)。年齢別では，30～39歳(9例)，2歳(6例)，7歳，10～14歳(それぞれ5例)の順に多く(表1-2-2)，保健所別では，鹿児島市(19例)，鹿屋(9例)，姶良(7例)からの報告が多かった(表1-2-3)。

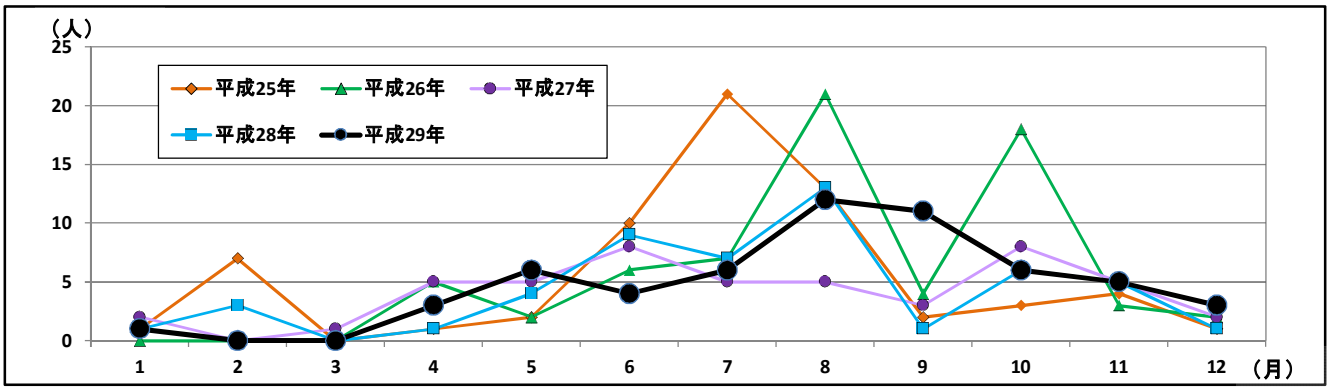

図1-2-1 腸管出血性大腸菌感染症の年別月別患者発生数

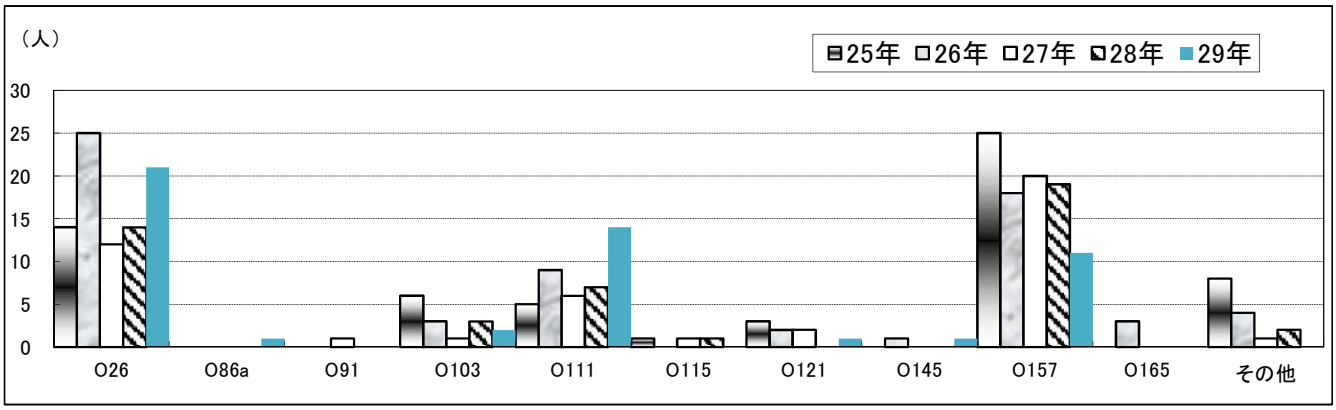

図1-2-2　腸管出血性大腸菌感染症の血清型別

表1-2-1　腸管出血性大腸菌感染症の年別血清型

年＼型別	O26	O86a	O91	O103	O111	O115	O121	O145	O157	O165	その他	不明	合計
平成20年	10	0	1	3	3	0	0	3	61	2	1	0	84
平成21年	17	0	2	3	4	2	1	1	41	0	1	0	72
平成22年	13	0	1	3	13	0	8	0	26	1	2	0	67
平成23年	49	0	1	9	3	0	0	4	32	0	2	1	101
平成24年	12	0	2	2	61	0	2	1	30	1	4	2	117
平成25年	14	0	0	6	5	1	3	0	25	0	8	3	65
平成26年	25	0	0	3	9	0	2	1	18	3	4	3	68
平成27年	12	0	0	1	6	1	2	0	20	0	2	5	49
平成28年	14	0	0	3	7	1	0	0	19	0	2	5	51
平成29年	21	1	0	2	14	0	1	1	11	0	0	6	57
合 計	187	1	7	35	125	5	19	11	283	7	26	25	731

表1-2-2　平成29年における腸管出血性大腸菌感染症の性別及び年齢別報告数

性別＼年齢別	～1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10～14歳	15～19歳	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～69歳	70歳以上	合計
男	2	4	4	1	4	1	3	0	0	2	0	2	3	0	2	0	1	29
女	1	2	0	2	0	1	2	0	2	3	0	2	6	1	2	2	2	28
合 計	3	6	4	3	4	2	5	0	2	5	0	4	9	1	4	2	3	57

表1-2-3　平成29年における腸管出血性大腸菌感染症の保健所別報告数

保健所	鹿児島市	指宿	加世田	伊集院	川薩	出水	大口	姶良	志布志	鹿屋	西之表	屋久島	名瀬	徳之島	合 計
報告数	19	4	5	0	4	0	0	7	4	9	3	0	0	2	57

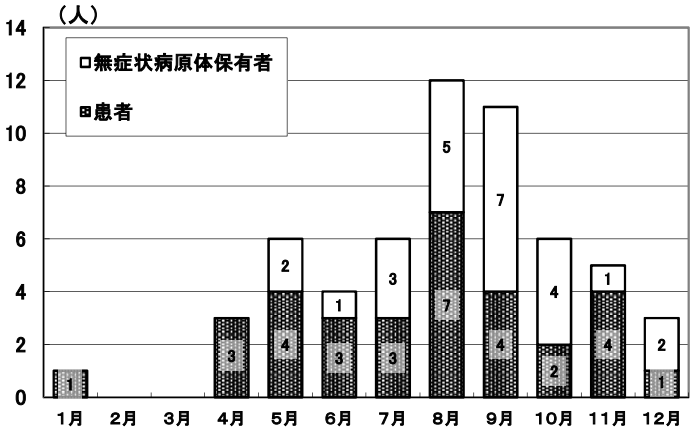

図1-2-3　平成29年における腸管出血性大腸菌感染症の月別・病型別報告数

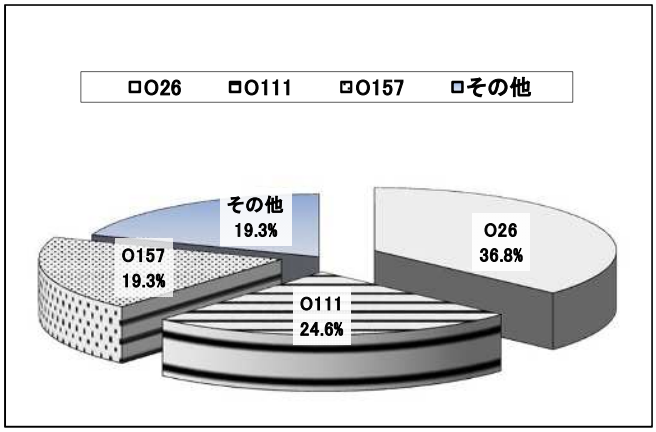

図1-2-4　平成29年における腸管出血性大腸菌感染症の血清型別割合

(4)四類感染症の発生状況

平成29年の県内における四類感染症は，つつが虫病(66例)，日本紅斑熱(18例)，重症熱性血小板減少症候群(11例)，レジオネラ症(7例)，A型肝炎(1例)，レプトスピラ症(１例)であった(表1-3)。つつが虫病及び日本紅斑熱の年次別報告数推移を図1-3に示した。

表1-3 四類感染症の発生状況

	疾患名＼年	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
四類感染症	つつが虫病	74	59	53	73	48	38	41	67	77	66
	日本紅斑熱	11	9	11	9	17	14	14	11	22	18
	重症熱性血小板減少症候群(SFTS)						5	4	6	4	11
	レジオネラ症	9	6	7	7	5	3	11	4	19	7
	A型肝炎	2	1	13	4	2	1	34	1	1	1
	レプトスピラ症	3	2	0	1	3	3	0	1	5	1
	E型肝炎	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0
	デング熱	0	0	0	1	1	5	0	1	2	0
	ライム病	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	マラリア	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
	合計	99	78	85	95	77	69	105	91	131	104

○つつが虫病

県内におけるつつが虫病の発生状況は，前年(77例)より11例少ない66例であった。都道府県別の報告数(447例)では，前年に引き続き全国第1位であった(2位千葉県40例，3位広島県38例)。性別では，男性が40例，女性が26例で，月別では，12月(39例)，1月(13例)，11月(8例)の順に多かった。年齢別では，70歳代(21例)，60歳代(19例)，80歳以上(12例)の順に多く，届出受理保健所別では，鹿屋(29例)，志布志(11例)，姶良(9例)であった。

○日本紅斑熱

県内における日本紅斑熱の発生状況は，前年(22例)より4例少ない18例であった。都道府県別の報告数（337例）では，広島県（69例）が最も多く，和歌山県（51例），三重県（42例），長崎県（20例）で鹿児島県は第5位であった。性別では，男性が6例，女性が12例で，月別では，5月，6月，7月，8月(それぞれ3例)，9月，11月（それぞれ2例）の順に多かった。年齢別では，80歳以上(10例)，60歳代(5例)，70歳代（2例）の順に多く，届出受理保健所別では，鹿屋(17例)，志布志(1例)であった。

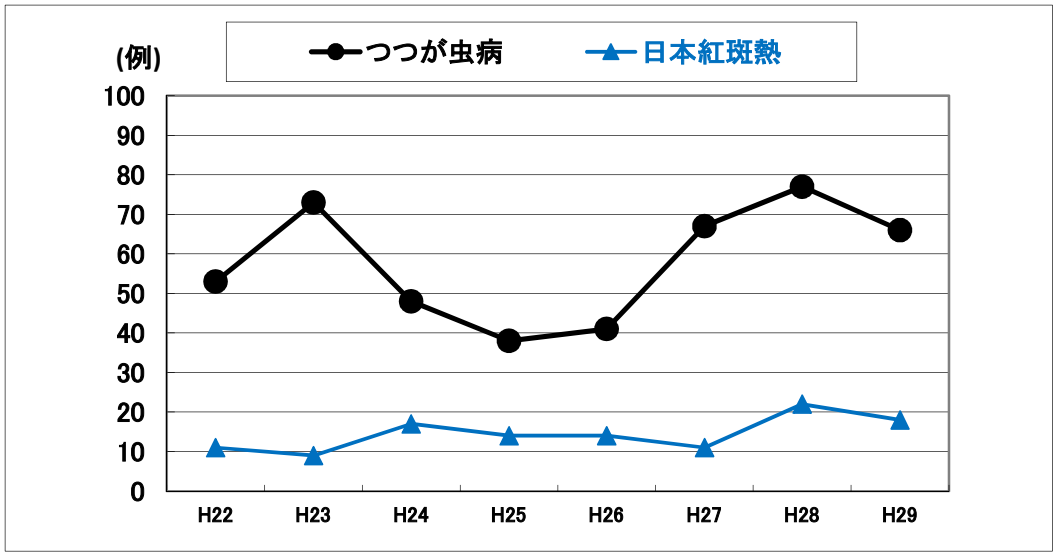

図1-3 つつが虫病及び日本紅斑熱の年別発生状況

○重症熱性血小板減少症候群(SFTS)

県内における届出状況は，前年(4例)より7例多い11例(男性5例，女性6例)で死亡例が4例であった。月別では，5月(4例)，6月，10月（それぞれ2例）であった。年齢別では，60歳代(4例)，80歳以上(3例)，70歳代(2例)の順に多かった。全国では，90例の届出があり，宮崎県(13例)，山口県(12例)，長崎県，鹿児島県(それぞれ11例)の順に届出が多かった。

○レジオネラ症

県内における届出状況は，前年(19例)より12例少ない7例(すべて男性)であった。病別では，全てが肺炎型であった。月別では，8月（4例），6月，7月，10月(それぞれ1例)であった。年齢別では，50歳代，60歳代，80歳代以上（それぞれ2例）70歳代(1例)の順に多かった。届出受理保健所別では，鹿児島市，志布志，鹿屋（それぞれ2例），大口（1例）であった。感染経路は水系感染が3例，その他不明が4例であった。

(5)五類感染症の発生状況

平成29年の県内における五類感染症は，侵襲性肺炎球菌感染症（24例），梅毒(21例)，急性脳炎(21例)，後天性免疫不全症候群(18例)，カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症（10例），アメーバ赤痢(7例)，クロイツフェルト・ヤコブ病（6例），破傷風，水痘：入院例，播種性クリプトコックス症（それぞれ5例），ウイルス性肝炎（E型・A型を除く）(4例)，劇症型溶血性レンサ球菌感染症（3例），侵襲性インフルエンザ菌感染症，侵襲性髄膜炎菌感染症，薬剤耐性アシネトバクター感染症，クリプトスポリジウム症(それぞれ1例)の届出があった(表1-4)。

表1-4　五類感染症の発生状況

疾患名＼年		20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
五類感染症	侵襲性肺炎球菌感染症						12	24	25	17	24
	梅毒	6	5	7	25	6	7	7	10	18	21
	急性脳炎	7	11	11	4	8	0	7	11	17	21
	後天性免疫不全症候群	9	10	13	13	8	12	12	9	11	18
	ｶﾙﾊﾞﾍﾟﾈﾑ耐性腸内細菌科細菌感染症							1	13	15	10
	アメーバ赤痢	3	2	8	2	7	5	6	7	7	7
	クロイツフェルト・ヤコブ病	22	1	5	3	3	4	4	10	4	6
	破傷風	3	10	5	5	4	4	6	5	4	5
	水痘(入院例に限る)							4	4	3	5
	播種性クリプトコックス症						0	0	1	1	5
	ウイルス性肝炎(E型・A型を除く)	0	0	1	1	2	5	8	4	6	4
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	3	0	0	0	3	2	1	6	3	3
	侵襲性インフルエンザ菌感染症						1	4	0	2	1
	侵襲性髄膜炎菌感染症						0	0	0	1	1
	薬剤耐性アシネトバクター感染症	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	クリプトスポリジウム症	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	風しん	2	0	2	2	4	386	0	0	1	0
	ジアルジア症	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0
	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	0	0	3	1	1	0	0	1	1	0
	合計	55	39	55	56	47	438	84	107	112	133

○侵襲性肺炎球菌感染症

県内における届出状況は，前年(17例)より7例多い24例(男性17例，女性7例)であった。年齢別では，0～9歳（8例），60歳代(8例),70歳以上(5例)の順に多く，届出受理保健所別では，鹿児島市(17例)，出水(3例)，徳之島(2例)の順であった。

○梅毒

県内における届出状況は，前年(18例)より3例多い21例(男性19例，女性2例)であった。病型別では，早期顕症Ⅰ期（12例），早期顕症Ⅱ期（4例），無症状病原体保有者(4例),晩期顕症梅毒（1例），年齢別では20歳代，30歳代，40歳代（それぞれ5例），50歳代（3例），60歳代(2例)，70歳以上(1例)の順に多く，届出受理保健所としては，鹿児島市(17例)，指宿，名瀬(それぞれ1例)の順であった。

○急性脳炎

県内における届出状況は，前年(17例)より4例多い21例(男性7例，女性14例)であった。
病型では，病原体不明(15例)，インフルエンザウイルス(6例)であった。年齢別では，0～3歳(9例)，4～10歳(5例)の順で，届出受理保健所としては，鹿児島市(16例)，鹿屋，名瀬(それぞれ2例)の順であった。

○後天性免疫不全症候群

県内における届出状況は，前年(11例)より7例多い18例(患者7例，無症状病原体保有者11例)で，性別では，男性(16例)，女性（2例）であった。年齢別では，30歳代(7例)，20歳代，40歳代，50歳代(それぞれ3例)の順に多く，届出受理保健所別では，鹿児島市(17例)，姶良（１例）であった。また，感染経路としては，同性間性的接触(13例)，異性間性的接触(3例)，不明（2例）の順であった。

○カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症

県内における届出状況は，前年(15例)より5例少ない10例(男性5例，女性5例）年齢別では，70歳代以上(5例)，60歳代(3例)，10歳未満（2例）の順に多く，届出受理保健所別では，鹿児島市(７例)，川薩（2例），鹿屋（1例）の順であった。

○アメーバ赤痢

県内における届出状況は，前年と同数の7例であった。病型別では，全てが腸管アメーバ症で，性別では，男性（6例），女性（1例）であった。年齢別では，50歳代（5例），40歳代，30歳代(それぞれ1例)の順に多く，届出受理保健所としては，鹿児島市(6例)，鹿屋(1例)の順であった。

○クロイツフェルト・ヤコブ病

県内における届出状況は，前年(4例)より2例多い6例(男性4例，女性2例)であった。病型別では，古典型クロイツフェルト・ヤコブ病(CJD)のほぼ確実（3例），古典型クロイツフェルト・ヤコブ病(CJD)の疑い，ゲルストマン・ストロイスラー・シャインカー病(GSS)診断の確実度（確実），ゲルストマン・ストロイスラー・シャインカー病(GSS)のほぼ確実(それぞれ1例)であった。また，年齢別では，60歳代（5例），70歳以上(1例)，届出受理保健所別では，鹿児島市(５例)，鹿屋(1例)の順であった。

○破傷風

県内における届出状況は，前年(4例)より1例多い5例(男性3例，女性2例)で，年齢別では，70歳以上(3例)，60歳代(2例)であった。届出受理保健所別では，鹿児島市，出水(それぞれ2例)，徳之島（1例）であった。

(6)獣医師が届けを行う感染症の発生状況

県内において獣医師が届けを行う感染症の報告例はなかった。